

Dear地球民

第四号

1990年7月発行

編集発行 やっさ国際交流協会

神奈川県足柄下郡湯河原町上肥1-7-1

湯河原町商工会内 ☎0465-63-0111



ヤッサ・ヤッサ 熱い交流

夏のやっさ始まる！

おなじみとなりました、やっさ国際交流も今年で5回目も迎えます。
東京の日本語学校で学ぶ外国人留学生と、ブラジルからの研修生が今年も湯河原の家庭で8日間を過ごします。やっさパレードにも“地球民連”として、ゆかた姿で参加します。皆さん応援して下さいね。

《スケジュール》

- | | |
|----------|--------------------------------------|
| 7/29 (日) | 14:00開講式 15:00歓迎ティーパーティー |
| 30 (月) | 午前 町内見学 午後 やっさ踊り練習 |
| 8/ 2 (木) | やっさパレード参加 (集合 夜 湯小グランド 時間未定) 雨天顺延3日 |
| 5 (日) | 11:00開講式 (商工会館) 留学生とホストの手作り料理が味わえます。 |

◎会員の皆様の参加をお待ちしております。

外国語講座ニュース

昨年につづき第二次外国語講座が始まりました。

中国語は第一回と同様の露木先生に担当していただきました。相変わらず中国の文化、生活習慣、食べ物の話し、等々が出てきて大変勉強が楽しくなります。

外国語を習得する方法は色々あるでしょうが、短期間の学習の場合は、相手国の生活を折り込むと一層の興味があり、効果があるような気がします。せいぜい参加者はこの点に注目されるよう頑張ってください。

英語の講座も同時に始まりました。今回は新しく岡スージー先生にお願いすることになりました。前回のルーシー先生のお友達であり、シンガーボール出身で日本人と結婚されて、お子さんが三人います。日本語、英語、中国語ができ、まさに国際的な方と言えましょう。

この先生の学習方法も、やはり文化、習慣、食事等の話題が多く、かなり興味もてる授業になりそうです。

いずれにしても、10回でマスターは無理として、外国の生活習慣が勉強できるのは面白いと思います。



Air Mail

湯河原にホームステイをした学生から、ホストファミリーに届いた手紙の一つをご紹介します。

デニーゼ・ヨシカ・エガシラさんは、日系三世のブラジル人。昨年の夏（社）日本ブラジル交流協会の研修生として約一ヶ月日本に滞在、その間「やさ国際交流」にも参加して、福浦の竹林徹雄さんのお宅で8日間を過ごしました。

秋には国際協力事業団のお仕事で来日された、デニーゼさんのお父様が竹林家にも立ち寄り、友好がより一層深まったようです。

親愛なる竹林家の皆様

ロンドリーナ 89年11月

ずっと手紙を書かなくてごめんなさい。ビデオと写真、大変有り難うございました。何度も見えています。やさ祭りと湯河原そして皆さんのことが思い出されます。

父が訪日中に皆さんのお宅を訪れたことを知り、とても嬉しかったです。父が私の日本の家族と近づきになるのは素直です。ブラジルや私の町、家族、そして私のことについてさえ、父はもっとわかり易く話したと思います。だって言葉の問題はないのですもの。私は英語で書いたり話したりするのでさえ、自分の言いたいことがうまく表現できません。でも勉強は続けるつもりです。私たちがわかり合う手段ですから。

このところ、私はたくさん仕事をしています。私の上司に赤ちゃんが生まれたので、彼女の代わりをしています。私がこの会社に来て間もないので、この事実をわかってくれない人もいます。最近私の町の外での仕事をすすめられました。サン・パウロの近くのサン・ホセ・ドス・カンポスという所です。でも今はここにいたいのです。週末にはロタラクト活動をしています。このことについて皆さんに話したかどうかわかりませんが、市町村のためのサービスクラブの一つで、国際的なものです。来年の7月ロンドリーナで地区会議があるので、私達がこのイベントを準備しなければなりません。演説や食事、宿舎など・・・

今ロンドリーナはとても暑いです。夏がきました。クリスマスや年の暮れは、ここでは夏なんです。日本と反対に。

この前11月15日に大統領選の一次選挙がありました。二次選挙、最終選挙では高得票の二人だけしか出場できません。投票は12月17日です。大統領選に投票するのは、私には初めてのことです。残念ながら私の応援した候補者は落選しましたが。

日本、湯河原ではどんなニュースがありますか。

皆さんの手紙をもらって本当に嬉しかったです。おとうさん、おかあさん、宏高、江利子ありがとう。手紙をださなくてごめんなさい。もっとひんぱんに書くようにしますね。

Missing you

Denise

追伸：ビデオはここブラジルでも大丈夫です。本当に有り難う。

ゆがわら国際交流協会の共催事業として、4月21日(土)に真鶴町民会館で行われた地球民トーク90は、アリアラトネ博士(スリランカ)・河辺隆也先生(筑波大学)のお二人を招き、多くの皆様のご支援ご協力によって開催されました。当日は激しい雨にもかかわらず、100名を越える皆さんが湯河原、真鶴はもとより、遠方からも参加していただき、充実した話し合いがされました。

アリアラトネ博士には、先進国が経済発展を追及し物質的豊かさを求めることに固守するばかりでなく、人々がシンプルに生きて、そして精神的な豊かさをもちと感ずることができるようになることの大切さを話していただきました。

河辺先生からは、21世紀は科学者が考え出す世界ではなく、皆さんがこうあるべきという世界を作っていくということが大切である、とお話しをしていただきました。このようにお二人から、21世紀は科学と精神の融合の時代であり、全世界に当てはまる幸福なライフスタイルを、“広い視野をもって地域に暮らす”(Think Globally Act Locally)ことを基本に、私達も考えていきたいと思います、有意義な話しをしていただきました。

また、アリアラトネ博士が推進するサルボダヤ運動に、当日出席された方をはじめ、多くの皆様より募金が寄せられ、総額10万3千218円を贈ることができました。この支援金はスリランカで、看護学校設立の資金に充てられます。

なお、この地球民トーク90の開催を記念して、スリランカの二つの初級学校にマナヅルプリスクール(シンハラ語で澄んだ精神)・ユガワラプリスクール(二つの日の出)という名前が付けられることになりました。



河辺先生はこれを契機として、この地域と筑波の研究者との交流を深めていくことを約束して下さいました。

このように今回の行事は、お二人の先生からためになるお話しを聞いたことはもとより、ささやかながら当地域とスリランカ及び筑波との交流にもつながり、意義あるものになりました。

先日ある新聞に次のようなジョークが掲載されていた。

ソ連のある町中で二人の出会いがあった。いつもの通り”やー調子はどうだい”
”まーまーだ。明日よりは少しはましだよ”このジョークはソ連特有のブラック・
ジョークに違いないが、大変深刻なジョークだ。ジョークに説明を加えるのは野蛮
なことだが、明日になれば、さらに生活の状況が悪くなるのでは、庶民としては、
たまったものではないだろう。今はそういう状況らしい。

70年ものあいだ他の世界を知らされず、閉ざされた生活を余儀なくされれば、
少しは感性もにぶるだろう。今ようやく集会の自由、通信、その他の自由を与えら
れて、むしろ戸惑っているのが一般の庶民の偽らざる気持ちではないだろうか。

終戦の時の東京の夜の光景を思い出す。今夜から各人の部屋の電器は明るくして
もよろしい、この単純な言葉が、どれほど東京人の心を和らげたことだろう。とも
かく毎晩の空からの爆弾を積んだお客さんが来なくなったのだから……。そして
大部分の人達は、解放された喜びをしみじみと心の中で味わっていたのだと思う。
しかしその喜びを街頭に出て、叫び出すようなことはしなかったと記憶している。

こんどの東欧諸国の劇的な解放をテレビで見た限りでは、何十万の人々が、その
喜びを街頭デモで表現していたのは、大変印象的なシーンだった。この二つを比較
して見ると、国民の性格の違いが出てくるのかも知れない。評論家の話しによると、
日本ではいわゆるデモクラシーの経験が浅いからから、本当の意味が飲み込めない
で、その喜びの表現をしなかったのではないか。

これと似たような現象がソ連でも見られる。爆発的な喜びの表現が見られなかつ
た。それよりも明日の生活が心配で、食糧の配給のほうに関心が強く、それどころ
ではないのかも知れない。

今年の夏にやってくるホームステイの希望者は比較的貧しい国からの人が多い。
日本がとびぬけて豊かな国といわれて久しいが、その恵まれた環境になれてしまっ
て、外国との比較もわれわれはやらない。

しかし、貧しい国から来た人達には日本が天国のようにうつろいのかも知れない。
私達の何げない生活ぶり、動作、言葉、が彼らの心を傷つけることはないだろうか。
きっとあると思う。かって今のお年寄りたちが敗戦の惨めな体験をし、その数々の
屈辱感は忘れられるものではない。しかし、国民の世代が若返り、その認識は薄れ
るばかりだから、せめて気配りは必要だと思う。

ホストファミリーの方は、色々気配りをして下さるだろうが、何げない心使い
が最高のもてなしになるだろう。

最近の世相の激しい移り変わりは普段の生活にはかかわりがないのだが、このホー
ムステイは国際的な行事になるわけだから、そのへんが少しばかり気になり、老婆
心ながら一筆した次第。

(石井 宏樹)